



写真-1 城山園地から諸寄漁港を撮影（令和4年8月撮影）

■ 最高のビューポイント「城山園地」

写真-1 は、城山園地（写真-2）から撮った諸寄※¹（もろよせ）漁港（管理者：兵庫県）です。城山園地は、国道 178 号の城山園地バス停付近から分岐したつづら折りの道进行ること 1、2 分の所にあります。狭い道なので対向車に気を付けながら走りましたが、平日だったからか対向車もなく、園地は貸し切り状態で、セミの声を聞きながらゆっくり写真を撮ることができました。

園地には、岡垣徹治らの歌碑や「風待ち湊・諸寄港」と書かれた説明板、山陰ジオパーク「諸寄港と千束断崖（諸寄西海岸）」の説明板などが設置されていました。平成 7（1995）年 3 月に浜坂町（現・新温泉町）教育委員会が設置した「風待ち湊・諸寄港」の説明板には、下記のような説明が記されていました。



写真-2 諸寄漁港から城山園地を望遠レンズで撮影

風待ち湊・諸寄港

諸寄港は、江戸時代から明治時代にかけて日本海を北前船が往来していた当時、「風待ち湊」として賑わった港である。諸寄の為世永（いはなが）神社境内には、全国の船主から寄進された古い玉垣や天保・万延・明治時代に奉納された船絵馬がある。また、諸寄の各家々には北前船の航路図や船名額、引札、船往来手形、客船帳等、船の航行に関する古文書が多く残されている。

諸寄港西側の岬を「日和山」と呼び、かつては暗夜を照らしていた常夜燈跡や和船を係留した杭跡等の史跡がある。諸寄港には北前船の「風待ち湊」として賑わった当時の面影がいたる所に残っている。

諸寄漁港は、昭和 27 (1952) 年 12 月 29 日漁港漁場整備法第 5 条に規定する第 2 種漁港に指定されていて、主に、イカ類、カニ、カレイが水揚げされています。

※1 諸寄：『美方郡誌』によると、古は「諸磯」と書かれていた。大化（645～650 年）の頃、表米親王（孝徳天皇の孫）が西国に出陣の際、この地に諸々の兵を集合させた（寄せた）ことから「諸寄」の字に改めたとはいえられている。

■ 北前船の「風待ち湊」として栄え、多くの人と物が交流した諸寄港

河村瑞賢が寛文 12 (1672) 年に確立した西廻り航路は、江戸時代から明治時代にかけて日本海から瀬戸内海経由で東北と大坂・江戸を結んだ経済の大動脈であり、この航路を利用した商船は「北前船」と呼ばれました。この船は、各地の物資を輸送するだけでなく、寄港地で仕入れた商品を別の寄港地で販売する「のこぎり商法※2」で利益を上げたことから「動く総合商社」とも呼ばれました。

諸寄港は、陸地に向かって扇を開いたように湾が広がる天然の良港で、日和山が西風を遮る地形を生かして北前船の「風待ち湊」として栄え、海産物や諸寄砥石※3、飲み水などが船積みされました。

また、多くの北前船の入港とともに全国各地から多くの人々が訪れ、中にはそのまま定住した船乗りたちもいて、瀬戸屋・讃岐屋・網干屋・山形屋・土佐屋・石見屋など、全国の北前船寄港地の屋号が残っています。

北前船は商品とともに各地の文化も運び、諸寄地区をはじめ周辺地域の人々に大きな影響を与えました。

これらの影響もあって諸寄地区からは、明治の歌人・前田純孝や異色の日本画家・谷角日沙春、社会教育家・篠原無然、日本画家でろうあ者の教育と社会参加に尽力した藤田威など、文化人や画家が多く輩出されています。



図-1 諸寄漁港周辺の地図

※2 のこぎり商法：近江商人の商法で、地元の特産品を江戸や大坂、京都などに運んで売り、その売り上げを元手に出先で商品を買、帰り道はそれらを売る。つまり、1 回の行商で行きも帰りも商いをするので、押しても引いても切れる「のこぎり」の名前がついたといわれている。ただ、日本ののこぎりは引くときに切り、西洋のものは押すときに切る、いずれにしても片道で機能するもので、往復では機能しない。

※3 諸寄砥石：砥石は金属や岩石などを切削、研磨するための道具。特に、諸寄砥石は研磨力が強く硬質で吸水力が低く僅かな水で砥げるので農家や狩猟者などに人気があった。天然砥石は、刃物への当たりが柔らかいことや切れ味が長持ちするなどの理由で、主として仕上げに用いられる。原料は主に堆積岩や凝灰岩などで、荒砥は砂岩、仕上げ砥は粒子の細かい泥岩（または粘板岩）から作られ、中でも放散虫の石英質骨格が堆積した堆積岩が良質であるとされる。日本は複雑な造山運動により、地底奥深くにあることで地圧により固められた良質な砥石となる堆積物の地層が採掘可能な深さまで隆起していることが多いため、採掘される砥石は良質で、現代も世界各地に輸出されている。この良質な砥石を用いて高度な砥ぎの技術が発達したため、硬度の高い刃物を製作することが可能になり、これに支えられ日本刀も発達し、鎌倉時代以降の武士の時代には需要が急増した。

※4 バラスト：バラストは、単純に重量を増し船舶の喫水を上げる効果のほか、重心を下げて復原性（左右への傾きに対する安定性）を増す効果もある。復原性を増す効果を最大にするため、バラストは船底に積み込まれる。なお、喫水を上げるだけでも、重量と浮力のバランスにより、間接的に復原性が増す。貨物船は貨物を積んだ状態を基準に設計されているため、空荷で喫水が下がると、復原力の低下、下方視界の遮りなどの問題が起こる。貨物船でなくとも、帆船は帆の重量でトップヘビーになりやすく復原力が不足するのでバラストが使われる。

西廻り航路を確立した豪商・河村瑞賢は、元和 4（1618）年 2 月 15 日伊勢国度会（わたらい）郡東宮（とうぐう）村（現・三重県度会郡南伊勢町）の貧農の家に生まれています。13 歳の時に江戸に出て、九十九里浜東端の飯岡で江戸幕府（桑名藩）の土木工事（樁海の干拓／新川の開削工事など）に携わり徐々に資産を増やしていきます。



経済が安定してくるにつれ、江戸の人口は増加し米が不足する事態になったことから、寛文 11（1671）年冬、瑞賢は陸奥国伊達地方（現・福島県）の御城米を江戸に回漕することを命じられます。

従来、海上交通の難所とされる犬吠埼沖※6 通過を避け、手前にある利根川河口の銚子で川船に積み換えて江戸へ運ぶ航路が使われていましたが、瑞賢は新たな航路として、寛文 11（1671）年に阿武隈川河口の荒浜から本州沿いに南下、房総半島を迂回して伊豆半島の下田へ入り、南西風を待って江戸に廻米する東廻り航路を開きます（図-2 参照）。

さらに翌寛文 12（1672）年、出羽国（現・山形県）の御城米の回漕を命じられた時には、犬吠埼沖に加え津軽海峡の危険度も考え、距離的には遠いが運航実績のある北国航路、瀬戸内海航路、江戸上方間航路を繋いだ西廻り航路を採用します（図-2 参照）。

従前は、敦賀で船の積み荷を馬などに積み替えて陸路で琵琶湖まで運び、琵琶湖から小型船に再び積み替え、淀川経由で大坂に入るルートが採られていました。瑞賢は、この積み替えにかかる労力と時間、費用を考えると、遠回りにはなりませんが、積み替えなしで行ける西廻り航路を採る方が費用も安く、一度に大量の物資を大坂に運べると判断したようです。

また、瑞賢は途中の寄港地を定めて入港税免除や水先案内船の設置も行うことで海運の発展にも尽力しました。

写真-3 は、瑞賢の生まれ故郷である三重県度会郡南伊勢町東宮の河村瑞賢公園に立つ「河村瑞賢翁像」で、平成 2（1990）年、南島町（現・南伊勢町）がふるさと創生事業の一環としてこの公園を整備し銅像を建立したものです。



写真-3 河村瑞賢翁像
（三重県南伊勢町の河村瑞賢公園）

※5 明暦の大火：明暦 3（1657）年 1 月 18 日から 20 日までに江戸の大半を焼いた大火災。「明暦の大火」・「明和の大火」・「文化の大火」を「江戸三大大火」と呼ぶが、「明暦の大火」における被害は延焼面積・死者ともに江戸時代最大であることから、「江戸三大大火」の筆頭としても挙げられる。外堀以内のほぼ全域、江戸城や多数の大名屋敷、市街地の大半を焼失し、死者数については諸説あるが 3 万から 10 万と記録されている。この大火で焼失した江戸城天守は、その後、再建されることはなかった。「明暦の大火」を契機に江戸の都市改造が行われ、御三家の屋敷が江戸城外に転出し、それに伴って武家屋敷・大名屋敷、寺社が移転した。また、市区改正（今でいう都市計画）が行われるとともに、防衛のため千住大橋だけであった隅田川に新たに両国橋や永代橋などの橋が架けられ、隅田川東岸に深川などの市街地が拡大されるとともに、吉祥寺や下連雀（しもれんじゃく）などの郊外への移住も進んだ。さらに防災への取り組みも進められ、火除地や延焼を遮断する防火線として広小路が設置された。現在でも上野広小路などの地名が残っている。幕府は防火のための建築規制を施行し、耐火建築として土蔵造や瓦葺屋根を奨励した。もっとも、その後も板葺き板壁の町屋は多く残り、「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるとおり、江戸はその後もしばしば大火に見舞われた。

※6 犬吠埼沖：海の難所として知られ、幕末には榎本武揚の率いる幕府の軍艦美加保丸が、付近の黒生（くろはえ）の岩礁に乗り上げて乗組員 13 名が亡くなった。今でも海の難所である。

■ 瑞賢は海運のみならず治水・灌漑・鉱山採掘・築港・開墾等の事業も指揮

延宝年間（1673～1681 年）、畿内は洪水が多発していたことから、天和 3（1683）年、幕府は淀川や大和川の抜本的な治水対策を講じるため、若年寄・稲葉正休（まさやす）を派遣し、その一行に瑞賢を随行させます。翌年、全権を委任された瑞賢は、水害の原因は淀川河口の九条島が水流を妨げていることにありとし、九条島を切り開き幅約 90m、長さ約 3km に及び人工河川（安治川）をわずか 20 日間で開削しました。

また、諸国から江戸に船で運ばれる物資の陸揚げの便宜を図るため、万治 3（1660）年に瑞賢が新川を開削したと言われています。その後新川沿い一帯は数多くの酒問屋が軒を連ね、一説では江戸の酒問屋の三分の一が新川に集約していたと言われるほどで、「江戸名所図会」にも当時の新川の様子が描かれています。また、新川は西宮～江戸間で行われた樽廻船による新酒の輸送レース「新酒番船」のゴール地点にもなっています。

新川のあった場所は隅田川に架かる永代橋の右岸側近くにありましたが、すでに埋め立てられていて、跡地には「新川之跡」碑と説明板が立っています。

瑞賢は、ほかにも全国各地で治水・灌漑・鉱山採掘・築港・開墾などの事業を指揮、その功により晩年には旗本に加えられています。元禄 12（1699）年 6 月 16 日没。享年 82。

■ 新温泉町が「日本遺産」に追加認定される

平成 30 (2018) 年 5 月、新温泉町が日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落」に追加認定されました。

この取り組みは、地域の歴史的魅力や特色を通じてわが国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定することで、ストーリーを語る上で欠かせない有形・無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

北前船の「風待ち湊」としての面影が残る諸寄には、文政 3 (1820) 年に難破した北前船の船員の供養を行った記録が残る龍満寺 (写真-4) や、廻船問屋として栄えた築 130 年の家屋・東藤田家邸 (写真-5)、全国の船主や廻船問屋が寄進した玉垣や灯籠 (写真-7・8)・狛犬があり、航海の安全を祈願する船乗りたちの信仰を集めた為世永 (いよなが) 神社 (写真-6) といった日本遺産の構成文化財があります。



写真-4 龍満寺



写真-5 東藤田家邸



写真-6 為世永神社

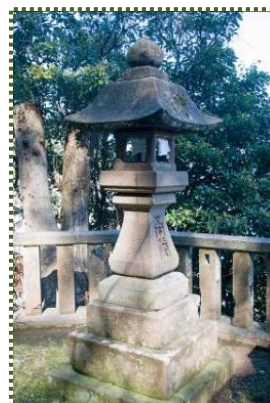


写真-7 石灯籠



写真-8 石灯籠

写真-7 の石灯籠には、「明治十八年六月吉日」「越後直江津 信濃増五郎」と刻まれています。

■ モノローグ

「板子^{※7}一枚下は地獄」、これは船乗りたちの覚悟の言葉です。冬の日本海は荒れるので、就航はおよそ春の彼岸から秋の彼岸までだったそうですが、それでも当時の航海は天候の変化を知る術がなく、熟練の操縦技術を持つ船乗りでも嵐にあえば一巻の終わり、常に危険と隣り合わせでした。しかし、そのような危険を冒してでも一攫千金の夢を追って多くの男たちが荒海を越えて行きました。

通信が未発達な時代、地域間の価格差が大きい産物を各地で買い集め、それを別の土地で高く売ることによって巨額の利益を上げることができ、上方～蝦夷地を 2 往復もすれば船の建造費が出るほどだったとか。

北前船は、俗称「ドングリ船」といわれるように、船足は遅いのですが耐波性や安定性に富み、多くの荷物を積むことができ、日本海の荒波を乗りきれる頑丈な船体でしたが、利益を重視するあまり過積載になり、荒天時には海難事故を起こすこともあったそうです。命あっての物種！！

ウミネコ（海猫）

カモメ科カモメ属に分類される鳥類でカモメとよく似ている。和名は鳴き声がネコに似ていることが由来とされる。日本では周年生息（留鳥）するが、冬季になると北海道や本州北部で繁殖する個体群は南下する個体が多い。繁殖形態は卵生で、集団繁殖地（コロニー）を形成する。諸寄漁港の荷さばき所（？）の屋根に留まっていた。



写真-9 ウミネコ

※7 板子（いたご）：和船の舟底に敷く揚げ板。

【参考資料】

- 1 『美方郡誌（復刻版）』 美方郡誌編纂同盟会編 昭和 60 年 12 月
- 2 『但馬事典～北前船と諸寄港』 公益財団法人但馬ふるさとづくり協会 平成 14 年 5 月
- 3 『近江商人に学ぶビジネス思考！with コロナ時代に必要な「三方よし」の精神』 和楽 web 令和 2 年 9 月
<https://intojapanwaraku.com/rock/culture-rock/117164/>
- 4 『北前船データベース～東藤田家住宅』 北前船日本遺産推進協議会HP
<https://kitamae-bune-db.com/db/higashifujitakejutaku/>
- 5 『但馬砥』 御吉兆 HP
<https://gokitcyou.shop-pro.jp/?pid=176802542>
- 6 『Ocean Newsletter 第 53 号～河村瑞賢に学ぶ』 海洋政策研究所 平成 14 年 10 月
https://www.spf.org/opri/newsletter/53_2.html
- 7 『なにわ大坂をつくった 100 人～足跡を訪ねて：第 27 話 河村瑞賢』 公益財団法人関西・大阪 21 世紀協会
平成 29 年 11 月 https://osaka21.or.jp/web_magazine/osaka100/O27.html
- 8 『たじま途中下車の旅～諸寄駅編』 「但馬情報特急」HP、公益財団法人但馬ふるさとづくり協会 令和 2 年 8 月
<https://www.tajima.or.jp/furusato/157909/>
- 9 『「日本遺産」ポータルサイト』 文化庁
<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/>
- 10 『諸寄漁港、河村瑞賢、明暦の大火、砥石、バラスト、犬吠埼、ウミネコ』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
- 11 『竹野町史・通史編』 竹野町史編纂委員会 平成 2 年 3 月
- 12 『県立歴史博物館がいざなうひょうご歴史の旅』 兵庫県立歴史博物館監修 神戸新聞総合出版センター編 平成 20 年 3 月
- 13 『安治川』 「関西の公共事業・土木遺産探訪」HP
http://dobokuisan.starfree.jp/89_ajigawa/ajigawa.html
- 14 『板子』 デジタル大辞泉

※発行：令和 6（2024）年 4 月 『ひょうご水百景』 No.195

改訂：令和 8（2026）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.195